

紅い花

(十八)最後の策

琉 紅

(十八) 最後の策

本部平原がうやうやしく言った。

「私は三つの命令を受けておりました。一つは北山王賢龍殿からの参戦の命、この城の裏口は、美久様からの密偵が教えただきました。二つは中山の大君からの策、北山軍が平地に出た後、本丸を焼き討ちすることです。お許しください。今朝、秘密裏に登城した策士にて脅されておりました。これも我が民を守るための手段……最後の命は、今実行しているものです」

彼の目前には、美久が座していた。本部平原は、
「よく、お聞きください。私が遅れて入城したのは、実は、屋敷で三番目の策を受けていたのです」

と話しては、目を閉じて大きく息を吸った。

甲冑が揺れる。

美久は静かに、

「最後に受けた策とは」

○時は、美久が城壁に立ち、詩を歌い終わつた頃に戻る。

「さあ、私はここにいます。討ちなさい！」

美久は本丸の城壁に立ち、中山本陣に向けて両手を広げた。その途端、本部平原の兵、四、五人が目前にたちばだかり、その一人が美久を抱きかかえるように後方へと引き戻した。さらに強引に美久の着物を脱がし始める。

「なっ、何をするのですか」

「美久様、どうぞお静かに」

その兵士は、美久の口に軽く手を当てる。

その時、南からの風が美久の頬を撫でて吹き抜けていった。風が何かを伝えようとしているかのようだった。

美久は、彼らの指示に静かに従った。

兵士は急ぎ調達した藁で出来た等身大の人形に、今まで着ていた美久の着物を着せ始めた。

直ぐに、美久がもと居た場所に立てられた。

目前の兵が去り、人の壁が取り払われた。

城の外からは、美久を説得しようとしたが、無理であり諦めた動作に見える。

着物を着た人形は、まるで再び弓矢で討つてくれと言わんばかりに手を広げて立たされた。

その後方には、本部平原につれられた若い女が戸板を持ち、

身を隠していた。

「さあ」

と、身を隠していた女の声。城外へ響く。

城外からざわつきが聞こえるが、直ぐに静かになった。数千人の兵士がこの場に居るはずが、誰一人として声を出さない、まったくの静寂。

矢が放たれたのか、矢先が城壁の石にぶつかる音が聞こえた。間を置かずに藁人形の足元、地面に突き刺さる。

風を切る音が次々に近づいてくる。

矢の一本が、美久の人形の胸から背中へと突き刺さり止まった。

「ぎゃー」

女は、戸板に隠れたまま大きく悲鳴を上げた。

弓矢がその一本に合わせるかのように、数十本、次々と突き刺さった。

女の悲鳴もそれにも合わせた。

僅かな隙間を見計らって、本部平原は人形に近づき、抱えるように後ろへ倒す。

本丸の庭は、最後のとどめを刺すかの如く、次々に射られる弓矢で覆い尽くされていく。

戸板に隠れた女の隣に、兵士がいた。

彼は、城外に向かって大声を出した。

「美久様！」

本部平原は神妙な顔で、

「久高、いいえ琉球の最高神人、久高ヌル様より、どんな事が起きようとも、美久を生きて戻せと命を受けました。中山の大君は自分を最高神人とする方針だそうですが、久高の神人の勅命に、私は背けません」

美久は、遠く南を向いた。

「ああ、あの時の風はヌル様の声。でも私は多くの命を奪っています。魔物に変わりました。ヌル様の期待に添えませぬ。島には、生きて戻れません」

「さあ美久様、早くこの着物を着てください。時間があります」

兵士により無理矢理、白い神人の着物を着せられた。

そしてクバの葉の冠をかぶせられた時、美久はよろめきながら手で払いのけた。

「いやーっ、私はもう、神人にも、人にも戻れない。私は鬼、鬼はここで死ぬと言っているのだ」

「失礼」

と、本部平原は美久の腹部を叩き、気絶させた。

「裏門に北山、最高の馬乗り達を集めよ。そして、血路を開け」

今帰仁城の裏門から、馬に乗った兵士等が駆け出していく。左右数頭に囲まれて、白馬を扱う兵士の後ろに賢龍、続く馬には美久が背負われていた。二人とも気絶したまま、馬の鞍に強く結びつけられている。

裏に待機していた連合軍から弓矢が飛んでくる。次々と兵士が討たれて落馬していった。

前方を取り囲む中山の弓兵がその駆け抜ける残りの馬を目前で確認する。

しかし、弓を引けない。

将兵が命令を下す。

「それ、矢を射るのじゃ。何をしておる！」

兵は弓を引いたまま震え、矢を放さない。

「白い馬、白い着物、クバの葉、神人等だ……神の使いを殺したら、罪が当たる」

おろおろしている中山の兵士の前を、賢龍を乗せた白馬はすり抜けていく。

後方の美久を乗せた馬にも弓は引けなかった。

二頭の馬は、風のように走り去っていった。

今帰仁城、全ての北山の兵士は武器を捨て、城壁の門は全て開かれた。

中山の本陣軍が隊列を整え、城壁へと進む。

残りの連合軍の兵士等はその道を開け、城を取り囲んだ。

大君は、燃えさかる城の本丸を見ながら、

「美久よ、何故、ここで命を落とすのか」

本部平原が城門の手前で、平伏し待ち受けていた。

尚巴志、大君、青江らがゆつくりと本陣軍の中から現れた。

本部平原は、彼らの足元を見ながら、

「北山王、さらに王子、軍師らも、本丸とともに焼け落ちました。亡骸はその中に」

大君は気を落とし、美久が立って居たはずの場所へと。

ふと、足元にクバの葉の欠けらが一枚、落ちているの気がついた。

「こんなところに」

大君は不思議がる表情で、本部平原の顔を覗き見ると、彼は一瞬目を反らした。

大君の口元がゆるむ。

尚巴志は周りの将兵らに、

「北山は王、軍師もろとも滅んだ。我ら中山連合軍の勝利だ。皆の者よくやった……」。北山の兵士諸君、琉球の最強兵士たち。これからは我らの連合軍として組み入れる。何も恐れることはない。また、存分に戦ってくれ」

と、声高らかに伝えた。

青江は、燃え盛る本丸を見て、

「馬鹿な女だったわ。なぜ、もっと利口に生きられないのよ……」

と、言葉は少ない。

一方で、大君は疑心暗示となっていた。

（美久は、救われたのか？ 誰が何の為に、美久を救うのじや？ あの若い王も一緒か）

そこに報告が入った。

白馬、白い布に赤の帯の入った神人の様相、馬二頭が今帰仁城を抜け出たという。

尚巴志の表情は厳しくなったが、大君の顔はほころんだ。

（そうか、分かった。神人等の仕業か、見事じゃ）

つづく